



監督＝行定勲／原作＝片山恭一  
 ／製作＝「世界の中心で、愛を  
 さけぶ」製作委員会／主題歌＝  
 『瞳をとじて』平井堅／出演＝  
 大沢たかお／柴咲コウ／長澤ま  
 さみ／森山未來／山崎努（東宝  
 配給／2004年日本映画／138分）

「これぞ純愛！」という片山恭一原作の大ベストセラー小説の映画化だが、映画では、大人になった朔太郎という新たなキャラクターを登場させ、ひと工夫している。白血病で死んでいく高校生を演じる長澤まさみの迫真の演技には、ただ感動！そしてカセットテープによる声の交換日記を核としたストーリー構成にも感心。今時の若者にも、こんな純愛に涙して欲しいものだ……。

## ♣ 原作の大ヒットと柴咲コウの功績

この映画と同名の片山恭一の原作『世界の中心で、愛をさけぶ』は、2001年4月の発売だが、2004年3月現在171万部という超ベストセラーになっているとのこと。しかし、この小説は発売当初からこのように「バカ売れ」になったのではない。『GO』（01年）で一躍トップ女優となり、その後は歌手としても大成功している柴咲コウは、この小説を読んで感動したとのこと。

そこでその思いを、情報誌『ダ・ヴィンチ』2002年4月号に紹介し、「泣きながら一気に読みました。私もこれからこんな恋愛をしてみたいなって思いました」というコメントが小説の帯に載った2002年4月から、この小説は大ブレイクし、2003年6月以降、35週間連続で文芸部門の売り上げ第1位をキープしたとのこと。

その意味では、この小説は、内容もさることながら、コマーシャルの成功によって、ベストセラーを続けてきたといえるのかもしれない。

## 🎬 思い出す『愛と死をみつめて』

私は片山恭一の原作は読んでいないが、「世界の中心」とは、オーストラリアのケアンズにあるエアーズ・ロックのこと。

ひと昔(?)前の「純愛モノ」の代表作といえば、何といても吉永小百合・浜田光夫の「純愛コンビ」による『愛と死をみつめて』(64年・日活)。軟骨肉腫という奇病のため、21歳の若さで亡くなったミコ(小島道子)とこれを支え続けたマコ(高野誠)の純愛は、あの当時日本国中の話題をさらったもの。

原作は、亡くなった大島みち子と河野実の日記。また青山和子が歌った『愛と死を見つめて』は1964年の日本レコード大賞を獲得した歌。左の顔面を白いガーゼで覆った吉永小百合の姿は痛々しく、浜田光夫の熱演と相まって観客の涙を誘ったものだ。

1964年当時、私は15歳の中学3年生。原作を読み、レコードを聴き、この映画を観て感動したことを、今でもよく覚えている。『愛と死をみつめて』では、マコが夢見たのは信州の美しい山々。マコは、必ずミコをその信州の山へ連れて行ってやると約束したが、遂にその約束を果たすことはできなかった。

そしてこの映画でも、「世界の中心」へ白血病の恋人を連れて行くことはできなかったが……。

## 🎬 何とも魅力的な亜紀役の長澤まさみ

白血病はおろか、およそ病気とは全く縁のない、健康的でハツラツとした美少女が高校2年生の亜紀。そして、頭が良くて運動ができて美人で、将来は芸能界入りと周りから認められ、少し「雲の上の存在」と思われていたのが亜紀。そんな亜紀を演ずるのは、第5回東宝シンデレラグランプリを受賞した1987年生まれの長澤まさみ。『阿修羅のごとく』(03年)では、黒木瞳の娘・里美洋子役を演じていた女優。美少女であることは当然だが、その演技力もすごい。そのうえカセットテープによる交換日記というストーリー構成の中、その語りだけで涙を誘えるほど、語りがうまいことに感心。

行定勲監督から厳しい演技指導や語りの指導を受けたことだろうが、これだけ

立派にそれをやりこなせるのは、やはり才能としかいいようがない。これからの注目株だ！

## 純朴な好演技を見せた朔太郎

大人になった朔太郎を演ずるのは、2002年～2004年にかけて『天使の牙』『荒神』『花』『スカイハイ』『解夏』とたて続けに主演をこなしている大沢たかお。この映画は『解夏』における主人公隆之役と共通する役柄だが、若いながらもその演技力は十分。感心したのは、高校生時代の朔太郎を演ずる森山未来。本作が映画初出演とのことだが、純朴で優しくて、包容力のある、亜紀の恋人役を見事に演じている。とりたててハンサムとかカッコいいわけではないのに、なぜ、あんなにずば抜けてカッコいい亜紀が朔太郎に興味をもったのかも、十分うなずけるといえるもの。

朔太郎自身が、亜紀は自分たちとは少し違う、高い位置にいる女の子と思っていたのに、亜紀が話をしてみたいと思うほど朔太郎のことに興味をもっていたのは、やはり朔太郎にそれだけの魅力があるということだ。

## 舞台は四国の地方都市

ちなみに、この朔太郎と亜紀の故郷は四国。そして四国は私の故郷。純朴な(?) 中学、高校時代の6年間を四国の松山で過ごした私は、ずっと受験勉強にケツをたたかれることなく、こんな恋をしてみたかったと思っていた。しかし私の中学時代には、多少心をときめかせたこともあったが、高校時代は、女性に関しては「暗黒の時代」だったことはまちがいない。

もっとも、大学に入ってからはその反動(?) があらわれ(?)、数々の恋愛模様が花開いたが……？

## 存在感のある写真館のおやじ、山崎努

この映画での最初の亜紀の「出番」は、女性の校長先生のお葬式での弔辞読み。女子生徒がみんなシクシクと泣くばかりの中、亜紀だけはしっかりと弔辞を。それだけでも出色の生徒であることがわかる。写真館のおやじ重蔵、通称シ

ゲじいを演ずる山崎努は、この校長先生が初恋の女性だった。そんな話を聞いても、朔太郎は「フーン」というだけだったが、早熟な亜紀はこれに興味を示し、シゲじいからその話を聞きたいとせがんだ。

そんな2人にシゲじいはOKしたが、「タダではいやだ」と言って、2人に課した宿題は……？ それは何と、お墓の骨壺から初恋の人の骨を1つ持ってこいというもの。怖いもの知らず(?)の2人は見事このシゲじいの宿題を果たしたため、この2人はシゲじいにとって特別な人(?)に……？

そのため、「自分の存在が忘れられてしまうことが怖い」という亜紀のために、シゲじいは、ウェディングドレスを着た亜紀と新婦姿の朔太郎との婚礼写真を撮ってやることに……。さらに後半ではシゲじいは、大人になった朔太郎とその婚約者、律子(柴咲コウ)との接点となり、大きな役割を果たすことにも……。

行定勲監督と柴咲コウの出世作となった『GO』における、山崎努の演技はもとより、いつもながらの寡黙で存在感のある山崎努の演技力に拍手！

## 2人の瑞々しい純愛模様

映画は、実に丹念に高校生の亜紀と朔太郎との間の瑞々しい恋愛模様を追っていく。最初のつながりは、亜紀が朔太郎のバイクに乗せてくれと頼んだところから。「方向が違うのになぜ僕のバイクに……？」と野暮な(?)質問をする朔太郎に対して、亜紀は笑いながらも「そりゃ決まっているでしょう。君と話をしたかったから」とはっきり回答。

中学生から高校1、2年生頃は、どうしても女の子の方がマセているのは当然だが、2人の「成熟度」を比べると、どうみても亜紀の方が上。したがって、2人の清く、淡い交際は亜紀がリードすることに……。

したがって、男の友情(?)で、プラトニックラブからの脱皮(?)を目指して、無人島での1泊旅行のため2人を送り届けた男たちの思惑(?)は実現せず、2人は清いままの関係に……。そして、この日、亜紀は突然倒れ、白血病だということが判明したのだった。

したがって、『愛と死をみつめて』と同様、亜紀と朔太郎の2人の関係は当然ながら清いまま……。

## スクリーンに流れる静かで美しいメロディの数々

2人を結びつける小道具はソニーのウォークマン。憧れの新品だが、3万円を超える価格のため、高校生の身分では手が出ない。そこで2人がとった作戦は、ラジオの音楽番組へのリクエスト。よくある手だ……。

そして白血病をネタにして書いたハガキが採用され、ウォークマンを手に入れた朔太郎は得意満面だったが……。白血病で倒れ入院した亜紀と、これを励まし続ける朔太郎を結びつけるのが、このウォークマンによるカセットテープの交換日記。そして、このカセットテープから亜紀の声が聞こえる中、流れるのが静かで美しい数々のバックナンバー。

最初、あれほど元気だった亜紀の声が、死が近づくにつれてゆっくりとなり、そして弱々しくなっていくのがいかにもかわいそう。

そして入院中の亜紀からの最後のカセットテープを預かった、ランドセルを背負った可愛い女の子は……？

## 今時の若者に味わってもらいたい純愛劇

戦後59年を経た今、日本人のあらゆる倫理・道徳・公衆観念は崩壊し、その価値観は大きく変容している。セックスの面における「乱れ」は特にはげしく、今時、高校2年生で男女「交際」をしている場合、セックス抜きということはほとんど考えられないと思われる。

そんなセックスをめぐる今時の時代に、いくら地方都市であっても、こんなにも瑞々しい2人の交際があることを、高校2年生の諸君をはじめ、今時の若者には十分味わってもらいたいものだ。

そもそも、「純愛」という言葉自体が「死語」になっているのではないかと思われる今の時代、なぜこのような純愛モノが大ヒットしたのかよくわからないが、これは、韓国ドラマ『冬のソナタ』が大ブレイクしたのと同じように、自分にはできないことへの一種の憧れによる現象ではないだろうか。純愛モノ大好き人間の私としては、単にマスコミのコマーシャルズムに乗っただけの一時的現象でないことを願わずにはいられない……。 2004(平成16)年4月16日記